

復活節第7主日礼拝 説教要旨(5月17日)

『神の国は近づいた』清瀬弘毅教師

マルコによる福音書 1:12-28

マルコ福音書はイエス・キリストが真の神であり、真の人であることを明確にしています。まず主は初めに自然の荒野にまさる人間のつくる荒れ野に行かれたのです。主は荒野で40日間過ごされました。主は聖霊に送り出されて荒野に行ったのです。主は神の子としての任務を果たす為に厳しい試練を受けられました。そして、主はガリラヤで伝道を開始されました。“時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。”私達の宣教もこの言葉に尽きます。ユダヤの会堂は教育の場でもあり、礼拝の場でもありました。イエス様は素朴な弟子たちを連れて会堂で教えられました。そこに一人の汚れた霊に取りつかれた男が主イエスに向かって叫んだのです。イエス様は彼に“黙れ。この人から出ていけ”とお叱りになったのです。その霊は大声をあげて出て行ったのです。人々は驚き、“これは権威ある新しい教えだ。”と言ったのです。

神が造られた世界には、こうした病気、そして苦しみは存在しなかった。人間が神に背いた時から世界が暗黒に変わってしまった。私達のこの世界は、人間を死の恐怖に陥れる力から生まれて来る憎しみの連鎖を抱えて苦しんでいるのではないのでしょうか。イエス・キリストは、この人間の罪の連鎖を断ち切ってください。十字架の上で、“父よ、彼らをゆるしてください”と祈られた主の姿を思い起こしたい。マルコ福音書は、キリストは言葉と行いによって、この地上に神の支配をもたらして下さったと語っています。